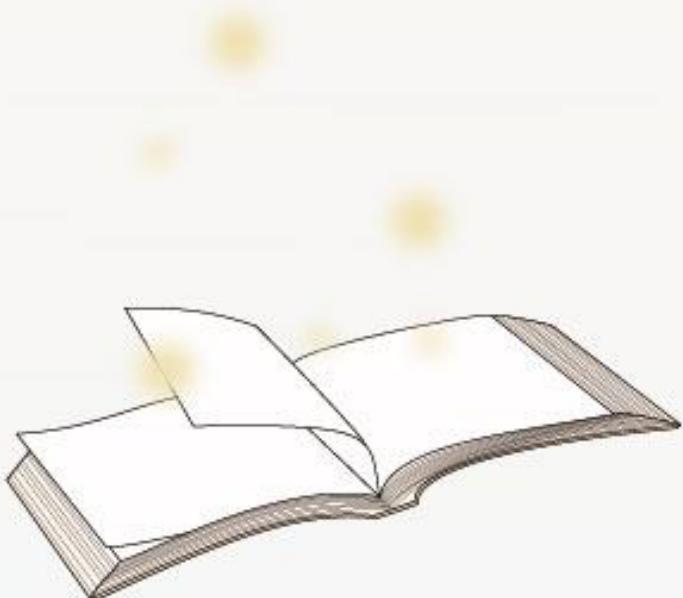


# 鉄の都



ゆらゆらと静かに揺れる波間を、一台の乗り物が走つて行つていた。

ほとんど周りに波飛沫を飛ばさず、しかしながらのスピードで走つている乗り物だつた。バイクという乗り物にも似ていたが、バイクとは違つて地上ではなく海上を走つていた。

さながら、水上バイクといったところか。下部についている筒から空気がすごい勢いで絶え間なく出ており、その勢いによって海上を移動している乗り物だつた。

その乗り物の主は、船ではなくその水上バイクで世界中を旅して回つている、旅人だつた。船よりも水上バイクの方が、小回りも利く上に出発時間を考えなくてはならないことがないのだ。

それに、水上バイクの方が走行速度が速く、移動時間を短縮できるのも選んだ理由である。

ただ、水上バイクはガソリンの量に限りがある。長時間の移動をするにはガソリンを積み込まなくてはならないので、荷物が重くなることは欠点だつた。

「おー。何か大きな建物見えてきたぞー。あれって人いんのかな」

乗り物の主が咳きながら、双眼鏡を手にする。どうも一人旅が長くなると、独り言が多くなつてしまつ。

建物は無人か有人か。有人だとしたら、旅人を受け入れてくれるのか。生活レベルはどのぐらいのものなのか。それが問題だ。

有人で旅人を受け入れてくれないと、これは最悪だ。過激なところでは、殺されかけたこともあつた。

逆に無人の場所はお宝を掘り出すこともできるので儲かることもある。だが、無人になつた理由によつては、ちらの命が危険に晒されかねないので注意が必要だ。

双眼鏡で見えた場所は、大きな鉄の塊だつた。黒々とした巨大な鉄の塊が、海に面した場所に建つていて、潮風の影響か、あちこち錆びていた。

鉄の塊は壁になつてゐるだけではなく、屋根にもなつてゐるようだつた。あれほど周りをがつちり固めてしまつては、陽の光が入らないのではないかと思つたが、それでもいい場所なのか。

街だつたとしたら面白い場所だなー。行つてみるかな」

アクセルを強く踏み、スピードを上げる。大きな水しぶきが太ももの辺りを濡らしていた。これは建物に着いたら乾かした方が良さそうだと思った。

鉄の塊は海沿いには入り口はなさそうだった。港というものがそもそも存在しなさそうな感じだ。

なので浜辺に一旦バイクを止め、上陸する。上陸した場合、バイクは街の近くまで持つて行くのが面倒で浜辺に寝かせて放つておいたのだが、浜辺に棲む生き物や通りがかつた人間に何か細工をされたのか、ひどいことになっていて修理しなくてはならないようになっていた。たまたま近くの街には腕のいい技師がいたので直つたものの、技師がいない街だつて多いため毎度毎度修理できるとは限らないし、何より金がかかる上に面倒なので、そのような事態にならないように対策しておいた方がいい。

街の近くまで持つていった場合、街の入り口で番をしている人に頼めば大体見ていてくれる。旅人歓迎という街ならばタダで見ていてくれるし、そうでない街でもいくらか包めば見張るぐらいのことはしてしてくれる。人間がない街の場合はバイクを持ったまま探索すればいい。

浜辺からぐるりと鉄の塊の周り全体を見渡すようになる。ぱつと見で入り口が見当たらなかつたので、もしかしたら入れない場所なのではないかと一瞬思つたのだが、少ししてその心配は懸念だつたと分かつた。

入り口は外壁と同じ色の鉄の壁だつた。大きな釘が何本も打たれており、見る者を圧倒させる。

怖そうな街だな、というのが第一印象だつた。何か危険なモンスターでも封印しているのだろうか。

「……とりあえず、入つてみるか」

ぱつと入つてみて危険そうであれば、すぐに引き返せばいいだけだ。一応武器は常備しているので、引きずり込まれそうになればその武器で抵抗すればいい。

扉は見た目通りに重く、開くのにも一苦労だつた。開閉のための部分も鏽びているようで、開く時にギギギと耳障りな音をたてていた。

入つてみて最初に見えたのが、モニターをじつと眺めている白衣の男だつた。視力が非常に悪いのがビン底眼鏡をかけており、そのせいで顔がはつきりとは分からず年齢が判断できない。髪は薄い緑色のキャップのようなものにまとめて詰め込まれている。

医療に携わる者のような格好だ。もしかしてこの街では、ひどい伝染病のようなものでも流行つてゐるのだろうか。

あの……」

「……ああ、入国したいのですか？」

入国と言うからには、この鉄の塊の中は一つの街になつてゐるのか。  
確かに、国と言つてもおかしくないほどの規模の建物だ。

ほい。大丈夫でしようか？」

大丈夫ですよ。ですが入国前に、持ち物検査をさせていただきますね。この国では、銃火器類および刀などの刃物の持ち込みは禁止としております」

私は銃を所持しているのですが、この場合は入国させていただけないのでしょうか？」

『え。出国まで、ちらで預からせていただければ問題ないです。では、こちらの荷物は一旦お預かり致します。あちらの男がボディーチェックを致します

ので、あちらの方へどうぞ』

入った時は男は一人だと思つたのだが、どうやら一人いたようだ。しかもモニターの前にいた男と全く同じ格好である。骨格以外は全く一緒の姿なので、少しだけ気味が悪い。

男にボディーチェックをしてもらう前に、気になつていたことが一つあつたので尋ねた。

あの、すみません。扉の外に私のバイクを停めているのですが、預かっていていただけませんか？外に置いていたら野盗に壊される可能性があるので…

…

ああ、大丈夫ですよ。あと、バイクの燃料は切れていませんか？もしよろしければお代をここでいただければ入れておきますが……』

本当にですか？お願いします！』

今まで預かっていてくれるところはいくつか見たものの、こんなに親切にしてくれる場所は初めてだつた。それに、ボッタクリというわけではなく一般的なガソリンの値段しか要求されなかつた。手間賃もいらないとは、かなり良心的と言えよう。

ボディーチェックはいやに手馴れた手つきだった。」の国には多くの訪問者が来るのだろうか。

「入国前に注意したい」とあります。まず一つ目に、滞在日を決めてください。そして、その滞在日に去るようにしてください」「ほい。……ええと、今日から五日間、お願ひします」

滞在日を決めて欲しいというのは、何か国の中でその日程分の用意をしてくれるのだろうか。  
突然訪れた旅人に特別な用意をしてくれる、」の人達は、やはり親切だと言えよう。

『そしてもう一つ。これは絶対に守ってください。守つていただけなかつた場合、その場で出国していただき、再入国はできなくなります』

先程よりもっと真に迫った顔をして、ボディーチェック担当の男が言つてくる。  
それほどこの国の中で守らなくてはならないことは何なのだろうと、睡を呑んだ。

『この国であつた』ことに、干渉しないでください。自らが危害を加えられた場合は別ですが、そうでない場合は関わらないでください。声もかけないでください。見なかつたら、戻つてしまふださい』

続きは、QRコードからダウンロードしてお楽しみください。